

英語力は驚異の伸び。4年間ですごい力がつく

全国初の公立大学法人としてスタートした国際教養大(雄和町)は10月1日、開学から半年を迎える。授業はすべて英語で行い、全学生に1年間の海外留学を義務づけるなど、実践的な英語を身につ

国際教養大 開学から半年

けさせるための独自のカリキュラムが注目される。生徒たちの英語力はこの程度向上しているのか。中嶋嶺雄学長に半年間の手応えと、今後の展望などを聞いた。

【聞き手・榎水方人】



学生の英語の上達ぶりをうれしそうに話す中嶋学長

中嶋嶺雄学長に聞く

— 学生の様子は。

◆ 英語力が驚異的に伸びている。TOEFL(英語を母国語としない人々の英語力を測るテスト。ペーパー形式は677点満点)の平均点が半年で47点上がり、500点を超えた。100点以上伸びた生徒もいる。イラク戦争や環境問題などについて英語で議論もできる。4年間いけば、すごい力がつくだろう。

— 課題、問題点は。

◆ ハード面の問題が大きい。図書館や寮の規模など設備が不十分なほか、アクセスも悪い。2

学べる外国語数や留学先増やしたい

年後くらいにはキャンパスを改修して大きくし、設的なサテライト講座を定める予定で、いずれは方が費用対効果などの点で有効。また、職員の増員も必要。職員の英語力は非常に高いが、みんな過労で大変だから。

— 今後の新たな取り組みと展望は。

◆ 韓国語、ロシア語なども学べるようにしたい。留学先も増やしていく予定で、最近ではモンゴル人文大学と協定を結んだ。また将来、英語の教員を養成する専門職大学院の設置や、世界の舞台で活躍するスポーツ選手を集めて英語を教える取り組みも検討したい。

来年以降、秋田市内で社会人らを対象にした常設的なサテライト講座を始める予定で、いずれは東京などでも開きたい。

— 知の拠点を目指す。

— 日本の大学はどうあるべきか。

◆ これからはソフト、アイデアの時代。設備の充実度などよりカリキュラムや教員の能力など、教育の自身が問われる。県外の大学関係者の評価も高く、文科省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」にも採択された。今後、大学改革のモデルケースとして影響を与えられると思う。

秋田